

週日の説教

金 大烈 神父 2011年5月7日(土)

《罪、暗闇の中でも、もっと光を求めましょう》

面白い話があります。

昼が終わると夕方になり、やがて夜になります。昼と夜の違いは、明るさです。昼は明るく、夜は暗くなります。初めて夜を経験した人間は、アダムです。昼間を楽しんでいたのに、だんだん空が暗くなり、暗闇になって夜になります。初めて夜を経験した時、たぶんアダムは驚き、怖かったことでしょう。そして、「これは何だろう。なぜこんなに何も見えないのだろう。」と思ったことでしょう。しかし、時間が経つと朝が来て、また光の世界になります。そのようなことを経験しながら何日か過ごすうちに、「1日はこのように光と暗闇が交互にやって来るのだ。」と思ったことでしょう。

今日の福音(ヨハ 6・16 - 21)を考えてみましょう。この聖書の内容は、復活前のことです。同じ内容が、他の福音書でも何回か出て来ます。このヨハネによる福音書では、イエス様が湖の上を歩いて来るのを見て弟子達が驚いた話になっています。しかし、他の福音書では、弟子たちが「幽霊だ」と叫んでいるものもあります。

さあ、この場面の中に入ったつもりで考えてみてください。向こう岸に渡ろうとして舟をこぎ出したのですが、暗くなり始め、よく見えなくなります。すると、薄闇の中で誰か、あるいは何かが水の上を動いているのが見えます。顔は見えないけれど、人間のように見えるものが、水の上を歩いて近づいて来るのです。それを見たら、皆様は驚くでしょう。「幽霊だ。」と叫ぶのはあたりまえかもしれません。そのくらい怖かったのでしょう。しかしイエス様は、「わたしだ。恐れることはない。」と言います。

結局、私たちがイエス様と出会うためには、どうしても暗闇が必要なのかもしれません。苦痛、何も見えない闇、それに対する恐れ、怖さ、そういう経験がなければ、復活であり、光であるイエス様とは出会えないのかもしれません。復活の信仰とは、そういうものではないでしょうか。

私たちは仕方なく、この世の中で闇を経験しながら生きています。暗闇を感じ、痛みを感じながら生きています。しかし、闇が闇として終わってしまったら、何の意味もありません。信仰とは、毎日ぶつかるいろいろな闇の中で、皆様が光を待ち望むことだと思います。そして、自分に近づいてくる光の中でイエス様と出会うことだと思います。

いつも私が申し上げているように、「恵みの罪」なのです。アウグスティヌス聖人は、「恵まれた罪」という告白をしています。もちろん、罪を犯さずに生きることができれば、それより幸いなことはないでしょう。しかし、私たちは必ず罪を犯してしまいます。だからこそ、「私は本当に罪を犯しました。」という告白をすることによって、神様の赦し、慈しみを更に感じられるのではないかと思います。

これは「罪を犯してもよい」とか「罪を犯すように」と話しているのではありません。皆様はいく

ら頑張っても罪を犯します。仕方なく罪を犯すのならば、そこからもっと光を求める心を強めてください、という意味です。

ありがとうございました。